
アイスクリーム

蛇不

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アイスクリーム

【Nコード】

N9211T

【作者名】

蛇不

【あらすじ】

8月3日。

父と子、二人の親子がお墓の前で手を合わせているところから、物語は始まる。

この日は主人公の少年、『シンジ』にとって特別な日だった。彼が殺してしまったと言う、母の記憶。

彼の視点で書いた回想が、ストーリーのメインとなります。

命日（前書き）

第一話です。

宜しく願います。

命日

8月3日

今日は母の命日だ。

母は俺が3歳の時、死んだ。

父「シンジ。俺は先に帰るから、後は宜しく頼む。」

今日で13回目の命日だが

父は毎回こうやって

足早に母の元を去る。

墓参りが終わると、俺はいつもアイスクリームを買って帰る。

別に「暑いから」と、いう訳ではなく。

この日は特別なんだ。

自転車の鐘「チャリンチャリン」

シンジ「……」

自転車の鐘の音を聞くと、思い出す。

母が死んだ

あの日のことを。

母を殺したのは俺だ。

幼き日の記憶（前書き）

第二話です。

宜しくお願ひします。

幼き日の記憶

話は14年前に遡る。

当時、俺はまだ大人の事情ってやつを当然分からなかったが、父から後で聞いた話だ。

父が勤めていた会社が、業績不振で倒産寸前。リストラ対象として父が選ばれ、リストラさせた。

まあよくある話だ。

それからは母も俺を育てながら工場で働いていたらしい。

俺は幼稚園に預けられ、迎えにくるのはいつも父だった。

母が帰ってくるのは夜の9時とか10時とか。遅い時には0時を回っていたこともあったという。

夜飯はいつも弁当かラーメンか……そんなものだった。

3歳にしては栄養のない食事をしていたと、父が言っている。

その事に関しては、別に俺も恨んじやいない。

寧ろ。

母に会えないことの方が辛かったと、当時そう記憶している。

そして、朝はまた早い。

8時には家を出ていく。

「チャリンチャリン」

と、いつも“行ってきますのブル”を鳴らして。

約束（前書き）

第三話です。

宜しく願います。

約束

そして“あの日”がやってくる。

その日。母の仕事が早く終わると言うので、仕事帰りにアイスクリームを買って来てくれることになった。

母「シンちゃん。いつもお母さん忙しくてごめんね。今日はシンちゃんの好きなアイスクリーム買ってきてあげるからね！」

シンジ「やったあ！チョコモナカ！チョコモナカがいい！」

母「わかった！じゃ〜良い子で待ってて！お母さん今日はすぐ帰ってくるから！」

「じゃあいつてきますー！」

そう母はニコニコ笑いながら言った。

そして母はまた「チャリンチャリン」とベルを2回鳴らし出ていった。

チョコレート（前書き）

第四話です。

宜しく願います。

チョコレート

そして夕方。

約束通り、母早くに帰ってきた。

母「ただいまあ〜。」

シンジ「おかえりなさい！チョコモナカ！チョコモナカ！」

俺ははしゃいだ。

今思うと、その態度からして、多分、母よりアイスクリームの方を優先していたに違いない。

しかし、そんな俺を見て母はこう言った。

母「ごめんねシンちゃん…。チョコモナカ売り切れだったんだあ…。でもほら！チョコレート買ってきたよ！はい！シンちゃん！」

この時俺は何を思っていたのだろうか。

多分期待していたアイスクリームじゃなかった事にひねくれてしまったのだろう。

「チョコレート違うもん！アイスクリームだもん！チョコモナカがいいもん！」

と、折角母が買ってきてくれたチョコレートを床に投げつけ、わんわんと泣きじゃくってしまったのだ。

優しい質問（前書き）

第五話です。

宜しくお願いします。

優しい質問

俺のその態度に、母は怒ることなく、

「シンちゃんごめんね…ごめんねシンちゃん…ごめんねごめんね…」

と、悲しそうな顔で俺をなだめた。

すると父が泣いている俺の元へやってきて、「こう言っつ。

「シンジ！わがまま言っつて食べ物粗末にするな！」と。

まあ当然だ。

その父の怒声に拗ねてしまった俺は、ひねくれた顔をし、黙ってその場に座り込んでしまった記憶がある。

そんな幼心の俺を気遣い、最初に話かけてくれたのは母だった。

「ねえ、シンちゃん。今日はハンバーグするんだけど、食べる？」

最近は何も聞かなくなった母の優しい質問。

しかし、一度拗ねてしまった俺は、その質問に、素直に答えられない。

すると母は、独り言のように言っつ。

「シンちゃん、手伝ってくれるかな？シンちゃんが手伝って
ないとハンバーグできないなあ。」

「手伝ってくれる？」

うつ向き、ひねくれた俺の顔に、おでこをくつつける。

その母の顔を、上目でチラッと見ると、そこにはいつもの笑顔が
あった。

俺は少し考えた素振りをし、首をコクツと縦に降る。

「よ〜しじゃあ作るっ〜！」

そう言うと、母は俺の頭の後ろを優しく撫でた。

今日までの想い（前書き）

最終話です。

宜しく願います。

今日までの想い

その晩はご馳走だった。

俺は小さな手で、ハンバーグを捏ねたのを覚えている。

そう言えば父は、俺が物心ついた時から、食べ物を残すことについて煩い人だった。

さっきの怒声は、そんな父だからこそ出た俺へのメッセージだ。

そう今では思う。

そして

夕飯を食べ終わると、直ぐ、いつものように父とお風呂へ入る。

その時間こえてくる。

「チャリンチャリン」

それが

俺が聞いた、母の最後の“いつてきますのベル”だった。

交通事故だった。

かごには、チヨコモナカが一つだけ
袋に入れて、かけられていたと言う。

あれから13年たった現在。
今日の度に想う。

何故あの時ひねくれてしまったのだろう。
何故あの時チヨコレートで我慢しなかったのだろう。
何故あの時ありがとうが言えなかったのだろう……。

後悔の念と、あの時、上目で見た母の優しい笑顔。
そして、最後に聞いた、あのベルの音^ねだけが、子守唄のように悲しく
頭に残る。

優しかった母はもういない。

FIN .

今日までの想い（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございました。
宜しければ、評価等して頂ければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9211t/>

アイスクリーム

2011年10月9日08時10分発行